

グループで話し合ったアイデアを発表する参加者
＝9日、八戸グランドホテル



公民館で民泊、60代の多地域居住

誘客や移住促進策探る

八戸で「あおもりツーリズム創発塾」

青森県南の観光客や移住者の増加に向けたイベント「あおもりツーリズム創発塾」が9日、八戸グランドホテルで開かれ、観光関係者や自治体担当者ら23人が「公民館で民泊を行い外国人を呼び込もう」「逆出稼ぎ」として60代に多地域居住を提案しては」などアイデアを出し合った。今後、具体的な観光・移住プランを作成するセミナーも開催予定で、参加者は活力創出のヒントを探った。(田村祐子)

八戸学院大地域連携研究センターと青森県の共催で、同大の玉樹真一郎学長補佐が進行役を務めた。

前半は有識者3人が情報提供し、インバウンド(訪日外国人旅行)マーケティングなどを行うVISIT東北(仙台市)の加藤遠取

締役は「旅行者と地域の人をつながりがつくれる」と民泊の可能性を力説。

仙台市・秋保温泉の老舗旅館「佐勘」の佐々木圭社長室長は「MICE(大型の国際会議)誘致など旅館

には伸びしろがある」と挑戦する姿勢を強調し、博報堂ブランドデザインコンサルタントの木下富美子氏は「地域ブランド創出の核は母体づくり。観光ビジネス活動体(DMO)が根付くかが鍵だ」と指摘した。

グループ討議では、参加者が「外部の人が空き家に滞在し、祭りに参加できる仕組みを作っては」「民泊受け入れに慣れる準備期間が必要」などと意見交換し、観光の将来を展望した。